

●最優秀賞 該当作品なし

今回、審査会で最も高い評価を得た提案は2点あった。しかしどちらも評価される観点と併せ、抱える課題・疑問点もあり、最優秀には至らない、という判断となった。

●優秀賞（2点）

偶然にも、「食」のテーマで、日常が非常時に移行する時の課題克服を追求した2点が選定された。共に「食の供給」を根底に置きつつ、一方は流通に乗せる個食の製品開発と広い普及の面から、一方はローカルな地域コミュニティにおける空間運用の面から、新しい社会システムを視野に置く興味深い提案を投げかけた。講評コメントは、審査会全体の見解を概略整理している。

優秀賞 No.30「ごとうち非常食」

テーマ・プランは、GDPC2017で最優秀賞を得た提案『福島県から発信する「贈る備蓄食」』と、類似し、そのための既知感があった。また実際社会においても、すでに発想としては近似のことが展開されている例もある。

しかし、対象を全国に広げ、被災地など特定地の支援・活性化というよりは、常日頃からの備え方に力点を置き、どこでも当地の食文化を活用して取り組み、企業活動として展開しやすいというフラットさはプランの強みとなった。実現可能性が高いところも評価される。

被災した時に、自分の故郷のものを食べられることと、各地のものも食べられること、その双方に、楽しみを含めた利点があるだろう。

優秀賞 No.33「ソナエ食堂～減災×食×建築」

日常と非日常をうまく繋ぐという一つの考え方、社会システムが提案された。実際でも、災害公営住宅としてこのような発想で作られた現場事例もある。しかし街中にこの場を作り、平常時に商業ベースで活用しつつ、災害時に備えるという観点が興味深い。

ただし、描かれた場を、実際には誰がどう使ってこのビジョン通りの成功に至るのか、その筋道が示されなかった。日常的にはどのように商業的に成り立つのか、非常時には誰がここを運用するのか。可能性は高くあるが、既存の事例に学び、その実現性という観点を含む提案が求められ、であればより大きな説得力・魅力となったかもしれない。

●審査員賞（7点）

入賞提案のうち、全体評価の高かったものから、審査員各自が1点ずつ、主体的に選定した。講評コメントも審査員による見解を主としている。

齊木崇人 選 No.03「仮設テントになる駐輪デッキと樹木支持鳥居」

歩道空間・街路樹をテーマに、仮設の普遍的活用、そのリアリティーを求め、日常と非日常をつなぐアイデアを引き出した。プランは図版だけで示されたが、さて、街路樹の樹種は何か。樹冠の大きさを考えると植樹の間隔が狭すぎるかもしれない。樹木の成長に伴う少なくとも20年の時間の変化に向き合うなら、この樹木支持鳥居が役割を終えた時、街路樹間に誕生する活用スペースはどう生かされるべきか。駐輪場としてのみ考えるのは勿体無い。日常的にお祭りや仮設店舗など、世代を超えたコミュニティが育まれる広場としてあれば、災害時の活用度合いもより具体性が描けるかもしれない。ぜひどこかに実験的に仮設し、アイデアを広く公開する等、プランの検証に期待がかかる。

佐藤 優 選 No.14 「津波から人々を救え!~鋼板桁橋を応用した、新しい避難施設の提案~」

浮棧橋や防災フロートなど、実際にすでに実現している類似事例があり、それと区別し得るかという議論があったが、この案では道路の一部を避難施設にしようとする点に新しい着眼点があると考えた。平坦地における津波や洪水時の避難施設の考え方として意義があるのではないかと考えた。支柱となる電柱等が普段どのように見えているのか、その道路が避難施設としてあることはどのように示されるのか等、各所に設置された際に共通・標準化するわかりやすいデザインなどの工夫を重ね、実用化に向けた提案へとつなげていただきたい。

森山明子 選 No.25 「Branchair」

普通の暮らしの場にある椅子が、いざという時に担架に変身するというのは良いアイデアだ。担架をどこかに保管しておくことや、それをなんとか持ち出さずとも、即座に負傷者を運び出すことができるなら、利点は大きい。これまでに全くなかったアイデアではないし、実現性の検証はまだのようだが、精緻に感じられるデザインも評価できる。

相良二郎 選 No.26 「Li Rescuer」

いまやスマホは多くの人が日常使いで持ち歩く必須アイテム。これが減災にどう活用され、非常に移行した際にも役立つのかという観点での探究・開発意義は年々増してきている。故に今日ではアプリの発案も数多あり、この提案もよくあるアイデアの一つと言える面もあるが、洗練されたまとめ方・見せ方が一歩秀でた。

荒木裕子 選 No.10 「減災支援段ボール(遊具編)~子どもの避難所生活の環境を整える~」

支援する立場と支援を受ける側をよりよく繋ぐツールの開発という視点が評価できる。災害時にどのように支援物資を送るのかという課題はあるが、子供が被災した子供の立場に共感する時の状況や、避難先でこれを加工する際の被災者同士のコミュニケーションにまで具体的なイメージを描いた。プレゼンの方法も興味深かった。

宮本 匠 選 No.60 「multi pocket bag」

自分もいま子育て中だが、赤ちゃんの抱っこ紐がいろんなものに変身するなら、喜ぶ親はいるのではないかと考えた。例えば車に乗せるときに邪魔になるそれを、シートにかけるだけで簡単にお茶とか入れられるようになるなら結構便利だろうと感じる、ぜひ使ってみたい。このように減災は、いまの日常を快適にすることからはじまる面もあるのではないかと考えた。

平林英二 選 No.15 「SaFeTy ToY」

類似の提案はこれまで幾度も繰り返されてきた。が、これはぬいぐるみの中に内包されるヘルメットが2つという点が際立った。過去の事例では、大切なものを入れておく、自身を守る等、その持ち主本人のことが考えなかった。形態的にちょうど収まりも良いし、1つで2人を救出しようという、他者への思いやりも込められた発想がとても良い。